# サンセット・ビーチ・ホテル

新井 満

# サンセット・ビーチ・ホテル

新井 満

文藝春秋

サンセット・ビーチ・ホテル

一九八八年七月二十日　第一刷
一九八八年八月十日　第二刷

定価　九八〇円

著者　新井満
発行者　豊田健次
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―一二一一
印刷　共同印刷
製本　大口製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

© Arai Man 1988
Printed in Japan
ISBN4-16-310400-3

目次

サンセット・ビーチ・ホテル　5
サンライズ・ステート・ビル　77
「あとがき」にかえて
ヘミングウェイ・ホームの婆さんへの手紙

装画　ジョージア・オキーフ

Georgia O'keeffe

"The White Trumpet Flower, 1932"

© 1988

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作品集

# サンセット・ビーチ・ホテル

帰り来って虚室に坐すれば
夕陽　吾が西に在り

（黄山谷）

サンセット・ビーチ・ホテル

飛行機が着陸態勢に入った。

〈またか……〉

どうやら、またどこかの島に降りるらしい。飛行機が停止すると数十人の乗客が席を立った。着陸のたびに一時間ほどのトランジット・タイムがある。坐りつづけて硬直しきった身体をほぐそうと桜木も席を立つことにした。機外へ降りたつと、名も知れぬ島はすでに夕闇である。滑走路の彼方に空港待合室と思われる建物が見える。近づいてみると、それは椰子の葉で屋根をふいた木造の小屋で、しかも丸太の柱のみがあって壁はない。およそ空港の建物とも思われないたたずまいなのだが、格子扉にペンキの英文字で〝ポナペ国際空港〟と書かれてある。

急に雨が降ってきた。スコールである。走って機内に戻ると、スチュアーデスの一人がおやっ、といった表情で桜木の方へ近づいてきた。

「ポナペで降りたんじゃなかったの」
「ああ、もっと先さ」
オレンジジュースの機内サービスの折にかわした会話で、彼女がグアム生まれであること、フィリッピン人と日本人の混血であること、そのおかげで英語のほかに流暢な日本語をしゃべってくれることを桜木は知っていた。機内を見回すと、サイパンを飛び立つ時にはただ一つの空席もなく座席を埋めつくしていた乗客たちの姿がいつのまにか消えている。終点の近づいた乗合いバスの車内のように、あちらにポツンと一つ、こちらにポツンと一つ、淋しげな人影がわずかに見えるばかりなのである。果ての果てまで共に行くことがわかったせいだろうか、急に緊張の取れた口調で彼女はなおも話しかけてくる。
「もっと先って、まさかクウェゼリン」
「いや、そのもっと先さ」
「まァ、それじゃあ、まさか、マジョロン島まで」
「その、まさかまでさ」
桜木がそのように答えると、彼女は驚いたというよりはむしろ（これはスチュアーデスの取る態度としてはいささか妙な具合だとは思うが）あきれたという表情で顔を近づけ、
「どうして、マジョロンなんかに」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

声を低くして尋ねる。
「どうして、と言われてもねェ……」
桜木は口ごもるよりほか仕様がない。
「だってあそこには何もないヨ。ほんとうになんにもない島なんだから」
「何も」
「そう、何も」
「しかし」
しばらくしてから桜木は口を開いた。
「しかし、何もないってこともまさかありえないだろう。現に今、この飛行機にしたって、そのマジョロンとやらへ行き着こうとしていっしょうけんめい飛びつづけているんだろう？　だったら、行き着かねばならない理由の何かひとつくらいはありそうなものじゃないか」
桜木の頭の中には、ただひたすらにミクロネシア最東端の島へ行ってみようということ以外、はっきり人にこうだと言えるような当ては少しもなかった。ビデオの方はすでに九分九厘、撮り終えている。たとえ、ミクロネシア最後の島マジョロンへ行きながら、撮るべき対象を一つも見出せず、むなしく帰ることになったとしてもスポンサーとの約束は十

分に果たすことが出来るだろう。しかし、そもそもこの地球上に、純粋に何もない、などという土地が存在するわけがないと桜木は考えている。どんな所へ行っても必ず何か一つくらいはある。たいていの場合、それが退屈な何かであるにしてもだ。しかし百歩ゆずってマジョロンが、スチュアーデスの言うように何もない島であるならばそれはそれで面白いとも思う。ひとつ、何もないということを確認するだけのためにも行ってみようじゃないか。

「マジョロン環礁か……」

彼女は唇の先をすぼめ、鼻の両わきにわざと小ジワを作った。どうやらそれが考えごとをする時のクセらしい。忘れかけていた言葉の断片を寄せ集めようとでもするように、ゆっくりと、

「マジョロン環礁……。およそ六十もの小島が点々と百キロメートル以上にもわたってほぼ楕円形に連なる。この環礁を指して〝宝島〟を書いたイギリスの作家、ロバート・スチーブンソンは〝太平洋の真珠の首飾り〟と呼んだ……」

「ほおら、みろ、なんにもないどころか、なかなかのものらしい島じゃないか」

「でもね、あなた信じられる？　蛇がとぐろを巻いて昼寝でもしているような島なのよ。だから、一番広い所でも幅数百メートル、狭い所ではわずか数メートルの幅、おまけに海

抜がたったの二メートルしかないの。津波が来たらどこへ逃げるのかしら。そりゃ、仕事だから何度か立ち寄ってはいるけど、正直言って気分良く落ち着いて居られるような所ではないわね。それに映画館や劇場があるわけでもないし。レストランと言えば、まずい中華料理店が一軒あるきりだし。ただ、くさるほどあるのはココナッツと珊瑚礁だけ」

彼女とマジョロンはよほど相性が悪いらしい。

「しかしそんな狭い小さな島にだよ、よくこんな大型ジェットが発着出来る飛行場を作れたものじゃないか」

「そこよ。マジョロンの人たちもあの人たちなりに考えたのね。たしかにあの島は幅はないけれど、長さだけはある島でしょ。楕円形にカーブする島の中で、一番まっすぐ延びている場所を特に選んだのよ。だから、それほど苦労せずに滑走路が作れたの。着陸する時に窓の外をよく見ていてごらんなさい。そのあたりには滑走路以外、なんにもないんだから。滑走路の左を見ればすぐ海。右を見てもやっぱり、海」

桜木次郎は、三十五歳になる。

職業欄には一応〝ビデオ作家〟と書くことにしている。一応というのはなぜかと言えば、現在の日本にビデオ作家を一枚看板にかかげて食べて行ける人間の皆無であることをよく

知っているからだ。だからCMの演出もやればテレビ・ドラマの脚本も書く。頼まれればより好みせず何でも引き受ける。ただ、ここ三年ほどのうちに大したお金にはならないながらも、B・G・V、バック・グラウンド・ビデオと呼ばれるジャンルのビデオ作品を百本近くも作っていたことにある日気が付いた。B・G・Vは、文字通りB・G・M、バック・グラウンド・ミュージックのビデオ版である。喫茶店のスピーカーから流れてくるB・G・Mを意識して聴こうとしないのと同様に、見てもいいし見なくともよいのがB・G・Vの映像である。見ること、聴くことを強要しない。多くの場合、B・G・Vには物語がない。始まりもなければ終わりもなく人物が登場することも稀である。例えて言えばそれは、部屋の中にあってものをしゃべらぬ家具に近い。カーテンや床板や壁紙にも似た存在かもしれない。いや、自分の姿すらも抹消しようとして限りなく空気に近づこうとするようなところが、この環境映像ともいわれるB・G・Vにはある。最も好もしい人間環境とは〝きれいな空気〟であるという考え方がある。B・G・Vの行き着く先とは、見えない空気のごとき存在なのかもしれない。それが人間をそっと包む。

桜木は、誰かに頼まれたからというわけでもなく、このB・G・Vを作りつづけてきた。それが知らぬうちにいつのまにか百タイトルをこえていた。その多くは日本の自然である。竹林、紅葉、滝、富士山、雲、瀬戸内の海……。CMロケの暇を利用して、そんな各地の

自然をリアルタイムで撮りつづけてきた。B・G・Vの撮影には、ビデオ・アート一般に要求されるテクニックは一切不用である。傍目(はため)には簡単に作れそうに見える。しかし実際はそうではない。時間と手間がかかる。それだけ余計に撮影機材費がかさむ。何よりも根気がいる。面倒がって、結局誰も真剣に取り組もうとしない。そういうジャンルの映像を桜木だけは飽きずに撮りつづけてきた。

＜なぜだろう……＞

桜木本人にも実はよくわからない。

そのうち、もの珍しがり屋のテレビ局が桜木のB・G・V特集を組んだりするようになった。桜木はいつのまにか日本におけるB・G・Vの先駆者のごとき存在になっていた。こわれるままに外国へビデオをかついで行くようにもなった。大学時代に知り合い、結婚した妻と疎遠になり始めたのは、その頃からである。生身の人間に対するより、人間臭が全く感じられないB・G・Vを撮るために大自然と対していた方が気分が楽だった。妻とは二年前から別居している。

中堅どころの旅行代理店からミクロネシアの美しい自然を撮ってほしいという依頼が来た。それを店頭用のPRとして使いたいし、場合によっては海のビデオ・パッケージとして売り出したい、というのである。

「飛行機のフリー・チケットを用意しておきます。半年ばかりかけて、ミクロネシアの行ってみたい所へお好きな時にお好きなだけお出かけください」

報酬は高いものではなかった。だが、心が動いた。珊瑚礁を見てみよう、と桜木はふと思った。ミクロネシアへ行けば、ほんものの珊瑚礁が見られるだろう……。

冬の終わりに引き受けた仕事は、春が来て夏が始まってもまだ終わらなかった。ミクロネシアは予想外に広かったのである。

夏が終わり秋が目前にせまっていた。それまでに何度ミクロネシアへ足を運んだことだろう。桜木の肌の色はすでに現地人と比べても遜色ない黒さになっている。撮影済みのビデオテープは八十時間を超えた。ミクロネシアの主たる島はほぼ歩きまわり、あとはわずかにマーシャル諸島を残すばかりとなった。

〈ミクロネシアへの撮影旅行は、今回をもって最後としよう〉

桜木は、そう考えている。

日本からサイパン経由でグアムまでが四時間十分。そこから南東のトラック諸島までが一時間四十分。そこから東のポナペ島までが一時間十分。コンチネンタル・エアー・ミクロネシア、通称、エアー・マイクのマークを尾翼に示したジェット機は座席の前半分を荷



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c